

奈良 勲・内山 靖(編)

「理学療法のとらえかた PART4—Clinical Reasoning」

大橋ゆかり
(茨城県立医療大学)

『理学療法のとらえかた—Clinical Reasoning』シリーズは 2001 年に初巻が刊行されて以来、2 年おきに“PART2”，“PART3”が刊行され、今回“PART4”の刊行となった。本シリーズは、1 巻につき 29～30 の独立したテーマを取り上げた完全オムニバス形式の本である。“PART4”も同様の形式で書かれており、昼休みに「今日のテーマとしてこの 1 章」というスタイルでも読み進んでいける。

本シリーズは副題にもなっている「Clinical Reasoning(臨床的推論)」を触発し、エビデンスの高い治療を提供できる理学療法士を育てようという生涯学習の理念のもとに編集されてきた。これまでに上げられたテーマは 118 章に及び、テーマは巻を重ねるに伴い広く・新しく、あるいは深くなってきている。“PART4”では、終末期医療や臓器移植への理学療法士の関わりといった新しい分野に関するテーマが取り上げられる一方、膝の臨床運動学や腰痛症のメカニズムなどの基本的なテーマが掘り下げられている。その他

にも、生活習慣病や介護保険などの今日的なテーマ、バーチャルリアリティやアフォーダンスなどの広範なテーマが理学療法士の視点から論じられる。また、様々な臨床的なテーマと並列に、OSCE(客観的臨床能力試験)、PBL(問題解決型学習)、シングルケースデザインといった教育・研究領域のテーマが取り上げられていることも特徴である。

ところで、“PART4”では新たにディベート欄が巻末に設けられ、6 つのテーマについて賛否両論が展開される。ここで取り上げられるのは「呼吸器疾患に積極的な徒手の排痰手技を実施するべきか？」など、日々の臨床活動に直結するテーマである。しかも、そのテーマについて賛否両論があるのだから、理学療法の根拠はまだまだ発展途上である。しかし、ディベーターのお 1 人である土井鋭二郎先生が書かれているように、「われわれ(理学療法士)には、先人から引き継いだ臨床経験・知識があり、それらを検証し、発展させる技術を持っているはずである」。理学療法士は医療のプロフェッショナルとして、エビデンスを集めて使うだけでなく、自らエビデンスを構築する責務も負っている。本書はその責務を果たすための一助になるに違いない。

●B5 判 460 頁、2 色刷
定価 6,300 円(本体 6,000 円+税 5%)
2007 年 文光堂・刊